

国内図書館所蔵ペルシヤ語図書の利用とイランの図書館の動き

——イラン史研究の立場から

阿部 尚史

中東・アフリカ

筆者は、一八、一九世紀のイラン史を研究しており、その分野を専攻する一利用者の立場から、首都圏を中心に、ペルシヤ語書籍所蔵状況を若干の独断をもって概観し、イラン現地の資料利用の現況と併せて、今後の研究の方向性にも簡単に言及したい。

●首都圏を中心とした、主要なペルシヤ語図書所蔵機関の蔵書内容について

東京大学東洋文化研究所図書室、文学部図書館…近代イランを中心とした人文系書籍(歴史書、思想書等)に比較的厚みがある。

東洋文化研究所には、古代イラン学の碩学、伊藤義教氏や言語学の荒木茂氏の旧蔵書も所蔵され、一九、二〇世紀初頭に出版された貴重な書籍が散見される。また、一九世紀中ごろから刊行された

Bibliotheca Indicaシリーズ(文学部)や、中世インド史の荒松雄氏らが収集した写本のマイクロフィルム(東文研)なども含めると、近代インドに関連する貴重なペルシヤ語資料にも見るべきものがある。

東京外国語大学付属図書館…ペルシヤ語学科とアジア・アフリカ言語文化研究所を擁する東京外国語大学図書館は、二〇世紀初頭立憲革命前後に出版された新聞の貴重なコレクションや、一九七九年のイスラーム革命以前の学術雑誌のコレクションをもつ。

東洋文庫…歴史、思想、文学を中心に幅広い分野をカバーし、国内最大のペルシヤ語蔵書を誇ると考えられる。イラン国内の各図書館の写本目録といったリファレンス類をはじめ、イスラーム革命以前の学術雑誌、国民議会およびイ

スラーム評議会の議事録、イスラーム革命関連パンフレットのコレクションも所蔵する。資料収集がほぼ毎年行われており、絶えずイランの出版状況が反映されている点に強みがある。また、岩見隆文庫やキャスラヴィー・コレクション(加賀谷寛氏が収集など、個人蔵書に由来する図書も所蔵されている。刊本等の他に、大英図書館やサントペテルブルク東洋学研究所に所蔵されるペルシヤ語写本のマイクロフィルムも所蔵されている。特に後者は非常に貴重なコレクションである(現在仮目録のみ存在)。同館は、ペルシヤ語蔵書目録、岩見文庫目録、キャスラヴィー・コレクション目録などを出版し、近年は、蔵書の電子検索も充実させている。二〇一一年初めに新館が完成し、五月から閲覧も再開する予定である。今後

もアジア研究の拠点としての活躍が期待される。同館について詳しくは、本誌二〇〇七年三月号参照。アジア経済研究所付属図書館…二〇世紀半ばから、定期的に作成されるようになったイランの公式の統計資料(人口世帯、産業、農業、労働に関する統計等)や、アフガニスタンの統計を所蔵する。同研究所の性格を反映した蔵書と言える。また戦前に尾崎三雄氏が収集した貴重なアフガニスタン関係ペルシヤ語資料も所蔵され、今後の利用が期待される。

京都大学付属図書館…一定数のペルシヤ語書籍を所蔵し、一九八〇年代初頭に作成されたペルシヤ語蔵書目録もある。アジア・アフリカ地域研究科の設立から一〇年以上経っており、現代関連の書籍も充実しつつあると期待される。

京都外国語大学付属図書館…ペルシヤ語の写本史料を所蔵し、写本目録もある。

この他、旧大阪外語大学を退職したラジャブザーデ氏が運営する私設図書館が、大阪吹田市にある。筆者は訪問したことがないが、是非近いうちに足を運んでみたい。

以上、雑駁に国内の図書館について概観したが、筆者が歴史研究

を専門とし、また東京在住ということもあり、他地域の大学・機関等の図書館所蔵状況に関する知識は、非常に限定されている。しかし、批判を恐れずに書くなら、(イラン研究に限定されることではないだろうが)資料収集が個人の力に依拠しているため、東洋文庫を除けば、本格的な研究活動を行うには、いずれの図書館も蔵書が物足りないということである。

一九世紀初頭に、イランにも出版技術が本格的に導入されて以降、官報の発行、新聞、雑誌の創刊など、利用可能な史資料が劇的に増大した。また、一九世紀半ば以降、当時の国王ナーセロツディーン・シャーが書きもの好きであった影響で、政府高官を中心に、回想録や旅行記の執筆が一種のブームとなった。近年、こうした回想録が盛んに出版されている。当然ながら、一九世紀末以降を対象とした史資料の体系的な所蔵は、相当の資金力と継続的資料収集の方針がなければ困難である。従って、史料が少ない前近代イラン史ならば、東京大学、京都大学の図書館はある程度対応できる蔵書を有すると考えられるが、資料数が急増する二〇世紀以降の

書籍に対応できる図書館は、東洋文庫を除いて、日本にはないと言つてよさそうである。

現在、日本の大学・研究機関の資金状況や人的資源に鑑みて、膨大な蔵書を誇る、アメリカの研究大学の図書館に做ったペルシャ語図書収集を期待するのは、現実的な話ではない。ただし、個人的な感覚からいえば、日本人イラン研究者がもつ個人蔵書は驚くほど豊富である。こうした個人蔵書をもっと活用する手はないのだろうか。ラジャブザーデ氏の試みを見ると、こうした可能性を考えることも的外れでもないように思われる。

●近年のイランの図書館・文書館の動き

現在、日本のイラン研究においても、現地留学・現地調査・史料収集が当然の時代となっている。ただし、本誌の最近の特集(二〇一〇年一月号)にもある通り、今もって現地の政治情勢は予断を許さず、また欧米諸国との政治的対立は厳しさを増している。アメリカは言うに及ばず、英仏の研究

者・学生も、長期の現地滞在は困難であり、現地での活動のしやすさという点では、(若干厳しさを増しつつあるものの)日本人研究者の利点は大きい。

筆者が最後に現地に滞在した二〇一〇年一〇月時点では、利用方法や制度の変化が激しいイランの研究機関のなかで、国立公文書館・国立図書館やイスラーム評議会付属図書館(以下議会図書館)の利用は比較的容易である。ただし、二〇〇九年以降、外務省歴史資料センター(附属文書館)の利用は著しく制限されており、早急な改善が望まれる。

議会図書館では、貴重資料(写本・石版本や文書)の整理・デジタル化を進めており、一部はイラン国外からもアクセスが可能になりつつある。同図書館の歴史文書センターは、積極的に立憲革命に関する文書史料の収集とカタログ化を進めており、利用も非常に便利である。加えて、同館は、国民議会・イスラーム評議会(第七議会まで)の議事録をはじめ、立憲革命期の一九〇六年までに出版されたペルシャ語雑誌五八タイトルや、同図書館所蔵のアフガニスタンで出版された古雑誌などをデジタル化し、DVDで販売している。この他に、現代史研究所も、

同所が刊行する、イランを代表する学術誌『イラン現代史』(Tarikhe mo'aser-e Iran誌をDVD化し、販売する(四〇号まで))。

一方、国立公文書館は、同館が出版した学術誌『文書の宝庫』誌(Ganjine-ye Asnad)や、新刊書籍をPDFファイルでネット上に全面公開を始めている。

以上、ごく簡単に概観したとおり、イランの公的な図書館・研究機関では、雑誌・図書の電子化が急速に進みつつあり、研究の利便性も向上しつつある。こうした動きは、まだ私企業の出版社にまでは及んでいないが、今後、イラン史研究の分野でも―特に近・現代史においては―、紙媒体の書籍と電子化された情報の両方を上手に組み合わせる研究を行うことが必要となりつつあるといえよう。

(あべ なおふみ/東京大学グローバルCOE特任研究員)